



「二人とも、18になったら魔法少女になるのよ」

第一章 前編

《黒いうさぎ》

双子の兄妹は、妹のほうが優れていた。
勉強も体育も芸術系も。

妹の名前は、奈々（ナナ）。

腰まで伸びた黒髪。全てを見透かすような黒い瞳。そして、兄よりも15センチも背が高
いにも関わらず、兄と同じ体重を維持するモデル体型。

学年どころか全国でも1、2を争う学力。

体育では、「5」か「A」以外取ったことがない。

美術では、何度か大臣賞を受賞している。

親の望んだ『良い子』をそのまま絵に描いたような妹だった。

兄は……、優れているとは言えない。

勉強は平均点からやや下。体育は…学年最下位レベル。芸術面は、『才能ナシ』。

努力の量だけは妹を遥かに上回っているのが、余計に哀れだった。

いや、上回っていたのは、『努力している時間』だけかもしれない。

妹だって多少の努力はしたのだから。

哀れな兄の名前は、望（ノゾム）。

望は、奈々とは違う高校に行きたがっていたが、それは厳格な母が許さなかった。

母は成績ではつきりと兄妹に格差を与える、成績至上主義者だったからだ。

母からすれば、成績の比較がしづらい別高校に通われるのは、厄介だった。

常に比較され続けることが、成績の悪い兄にとっても良い教育になると信じていた。

…。

……。

……… 本当はそんなこと信じていない。

ただ、子供の世界を自身が管理し、制圧することでストレスのはけ口にしていて。

双子の母は、そういう女だった。

母の名前は、モモ。

父親は、二人が生まれてからすぐに死んだ。

学校から帰り誰も家にいないことを確認した兄の望は、ほっと一息ついて、トイレに駆け込んだ。

中間テストが帰ってきたので、母が家にいれば提出しなければならぬ。正直点数は芳しくないのだ。

少なくとも妹に太刀打ちできる点数ではない。

今日、この後待っているのは、母の叱責と妹の優越感に満ちた微笑みだ。

暗い気持ちのまま、便器の前に立ち、社会の窓を開ける。

真性包茎のチ○ポから、包茎特有のドボドボとしたオシッコを出しながら、望はいつの間にか出来た壁の黒いシミを見ていた。

黒いと言うにはあまりにも深い黒。

黒過ぎて、そこに物体があるのか、触れてみないと分からない。

「本当に、穴でも開いてるんじゃないか？」

家という安全を保証されていると思いがちな場所故に、望は指でそのシミに、何の警戒もなく触れてしまった。

黒いシミの中に真珠色の二本の前歯が浮かぶ。

前歯はすぐにもふもふした肉の塊の下に隠され、数センチ上にギョロリとした瞳が浮かんだ。

黒い瞳の周りに、うつすらと白目が無ければ望はそれを瞳と認識できなかつただろう。望を見つめるシミ全体が、黒いうさぎの顔に見えなくもない。

「何だ、モモの子は男ですか。」

あ、今の『男可』に聞こえますね！

まあ、私共は穢れを知らぬ者であれば、男でも構いません」

「ヒッ！」

望が慌てて指を引っ込める頃には、すでに遅かった。

手袋などしていなかったはずの手に、艶々で細身の白い手袋が被せてある。

腰には、社会の窓を開けていたはずのズボンやパンツは無く、花ビラのように深く切れ込みの入ったミニスカート。そして、黄色く膨れ上がったかぼちゃパンツ。

かぼちゃパンツからは、望の出したままのオシッコ染み出しており、膝のはるか上まで覆うニーハイソックスを湿らせていた。

「ほぎゃッ！」

漏らしてる！」

「あゝ、それが希望の魔法でいいのでしょうか？
それともそれは対価……ということでしょうか？」

黒いうさぎは首を少しだけ傾げながら、望に質問しているようだった。
『ようだった』というのは、望がそれを質問されていると認識したのは、オシッコ中の為
意図がよく伝わらなかったのである。

「あ……あ……、お母さんに叱られる……。
奈々にも……また……バレて……笑われる……」

「ふ……くん？」

変わっておられますね。

じゃあ、オシッコのオモラシが魔法。

お母様であるモモに叱られるのと奈々さん？ にオモラシがバレて笑われるのが、魔法の対
価。

これで、宜しいですね？

おめでとうございます。

今日から、のぞ……、のぞ……、なんと読むんですか？

ノゾミ？

ノゾミ様。おめでとうございます！

今日から貴方は、魔法少女です！

魔法少女、ノゾミ様。

何処かで白いうさぎが、貴方の敵である『別の魔法少女』を生み出していることでしょう。

相手の魔力を使い果たさせるのです。

それが勝利条件。

魔力は、対価を支払わねば枯渇します。

相手の対価を突き止め、対価を支払わせることなく魔法を使わせるのです。

そして魔力を使い果たさせる！

ちなみに……ッ！

負けると一生、相手の魔法少女の『使い魔』に墮とされますので、十分ご留意ください」

そう早口で告げると黒いうさぎは、黒い水滴を一滴だけ床に落として消えてしまった。

「……あゝ……」

母、モモの声とともにトイレのドアが強く叩かれ、ようやく放心状態から回復した望の視界には、社会の窓から垂れ下がる小指ほどのチ○ポと、そこから漏れ出たであろうオシッコが床に広がっていた。

「待って！ すぐに出るから！」

「駄目です！」

「いますぐ出なさい！」

「奈々ちゃんが待ってるでしょッ！」

トイレのドアは鍵がついている。鍵がどこにあるかなんて、母も知らないだろう。

しかしだからといって放っておくのは悪手だ。

この後待っているのは中間テストの結果、………つまり叱責だ。

それは間違いなく、確実に行われる。

だからこそせめて機嫌を今以上に損ねたくはない。

望はトイレットペーパーを手に巻くと、そのまま床に伏せて必死で黄色い水たまりを拭き取り、トイレに流す。

しかしトイレマットに染み込んだオシッコだけはどうしようもなく…。

望は観念してドアを開けた。

ドアの向こう側には、腕組みをした母と、まったく慌てる様子もなく「望。私、もうトイレ入れる？」と微笑む妹、奈々。

妹を見る限り、緊急性など皆無なことは明らかだ。

妹の横の母は、驚くこともなく真っ直ぐ望の瞳を見下ろして、睨んでいた。

まるで望が中で何をしているか、知っていたかのように。

そして、素早く望の耳を摘み、トイレから引き出した。

「奈々ちゃん。望はマトモにトイレも出来ないみたいだから、叱ってくるわ。

悪いけどトイレはサンダルを履いてからしてくれる？」

片付けは良いわ。望にさせるから」

「は〜い、ママ。」

「ママなんて呼ばなくていいわ。」

奈々ちゃんは優秀だから。

モモで良いのよ」

「はぁ〜い、モモ」

手をひらひらとさせて、奈々は使っていないサンダルを探しに向かう。

一方、望は耳を摘まれ、引き立てられるように風呂場に連れ込まれた。

そして、一閃。

耳を摘んでいない方の手で…、モモは出しっぱなしの、望の短小チ○ポの皮を母に摘み、引きちぎればかりに引き上げた。

「いいいいいいいいッ！」

「望ッ！！！！！」

貴方、オシッコもまともに出来ないのッ？

もう高校も卒業なのよ？

18でしょ!?

それなのに、あんなに撒き散らしてッ！

そのオシッコまみれの服を脱ぎなさい！

早くッ！」

「ひぎいいいい！！！！」

は…はい………ッ！

脱ぎますッ！

脱ぎますから、離してえええ！！

ママああッ！！！」

望が母であるモモを『ママ』と呼んでも、モモはその呼び方を改めさせたりは絶対にしな
い。

確かに奈々はすでに一人前と認めているので、名前で呼ばせることにした。

しかし、その兄であるはずの望は、ダメだ。

きちんと『ママ』と呼ばせる。

『一人前どころか、手のかかるダメな子』と認識しているのだと、望に理解させるために。
モモは、望の顔にかかるほど大きなため息とともに、真性包茎の皮を離す。

「全部脱ぎなさい。

パンツも靴下も。」

全裸になるのよ。

あら、ワイシャツは濡れてないのね。

良かったわね。チ○ポが小さくて。

大きかったらコツチも洗濯しないとイケなかったかも。

……：パパはあんなに大きな、立派なおチ○ポだったのに。

望はどうしてこんなに小さいのかしらね。

しかも、真性の包茎……。

望……：貴方、童貞でしょ？

こんな小さくて、真性包茎じゃ女の子には相手にされないものね。

パパは貴方ぐらいの頃には、毎日私を抱いていたわよ。

それも生で……。

だって貴方も奈々ちゃんもその頃の子供だもの。

それなのに、貴方は………。

まだトイレもマトモに出来ないなんて……。

とりあえず、ここでトイレマットの洗濯とそのオシッコまみれの制服を洗いなさい。

洗濯機は使わないで。

オシッコ臭くなったら、困るもの。

手洗いで洗うのよ？

それからトイレの床の掃除。

それが終わったらシャワーで身体を綺麗にしなさい。

身体を綺麗にしたなら、台所で正座。

ご飯の支度が終わったら、お仕置きをしてあげます。

それと、許可を出すまで服を着ることは許しません。

全裸でいなさい。

分かったわね？」

「……：はい、ママ。

分かりまし」

ぴしゅんっ！

モモは望の返事が終わる前に、風呂場のガラス戸を強く閉め、望の助けを求める瞳を拒絶した。

そして、望が制服に手をかけ蛇口をひねった所で、再び風呂場のガラス戸を開け、投げ捨てるようにトイレマットを放り込み、再び力強く閉める。

望は、経験的に今何をすべきか知っていた。

空に向かって「ごめんなさい、ママ」と言いながら、命じられた仕事をこなさなければならぬのだ。

今はそうではないが、時折母親が、望の知らぬ間に様子見に来ていて、反省の色が見えないと判断すると、罰を重くする。

それが母と息子の間にだけ出来た『ルール』だった。

『望の反省は、

永く…。

重く…。

徹底的に……。

繰り返し続けなければならない』

望がモモの更なる叱責を買わぬレベルまで洗濯、トイレの床掃除、さらにシャワーを浴び終えた頃には、すでにモモと奈々は、夕食を摂っていた。

「あの…」

「望は夕飯抜きよ。

私達の夕飯が終わるまで、玄関で正座してなさい」

「え…。あの…。

この格好で…」

「そうよ」

モモは冷たく、そして短く、そう言うと、質問も交渉も許さないという意図なのか、望から視線を外し、奈々とTVを覗いて笑った。

望に選択肢はない。

たかが、トイレの失敗…ではないのだ。

『成績至上主義』の母に少しでも従順な姿勢を取って、この後待ち受ける中間テストの叱責を今以上に重くしないよう努めなければならない。

全裸のまま、玄関で正座。

これは本当にキツかった。

そして、母はもはや自分のコトなど忘れてしまったのではないかと、望が思い始めた2時間後。

奈々が望を迎えに来た。

『お兄い〜ちゃん』っ。

ママ…、おっと。モモがお仕置きの間だったって。覚悟できてるっ？」

「(いつか殺してやる)」

奈々は、望が追い込まれている時、モモに叱られる時のみ、望を『お兄ちゃん』と呼ぶ。とつても馬鹿にしたように…。

望は妹を心底恨めしく思ったが、今はそれどころではない。

ゆっくり顔を上げ、母のもとに向かう。

母が待っていたのはトイレだった。

モモは黙って便器を指差す。

その意味は、『お尻叩きをするから、ここに手をつきなさい。手をついたらお尻をコツチに向けなさい』

そういう意味だ。

望は、半日以上全裸で過ごし、寒さに強張った身体のまま指示に従う。

「ではこれから、望に罰を与えます。望。

お仕置きされる理由を言いなさい」

「僕が…。

トイレで…オシッコを漏らして…。

妹の奈々に迷惑をかけたからです」

「じゃあ、奈々ちゃんに謝りなさい」

「(…)(めんなさい)……」

「ダメツ！

許さない。

今にも漏れそうだったの。

待たされてる間、すっつつつごく辛かった。

しかも、そんな適当な謝り方ツ！

ちゃんと土下座してッ！」

「(あんなに余裕たっぷりだったじゃないかッ!)」

望が奥歯を噛み締めると、モモは望のお尻を叩いた。

パンッ!

「ふぁぎッ!

ママ、ごめんなさい」

「許してもらえないなら、仕方ないわね。

お仕置きしてもらった後、奈々ちゃんにもう一度謝りなさい。

前にも教えたでしょう?

奈々ちゃんは貴方とは、身分が違うの。

そのあたりをしつかり踏まえた上で、謝りなさい」

モモの言い方は遠回しだが、この場にいる3人はそれがどういう意味か分かっている。

望とモモの成績が離れ始めた頃から、母は2人が喧嘩する度に言ってきた言葉だ。

『奈々ちゃんは、望よりも身分が高いの。

喧嘩は全て、望が悪いわ。

理由も内容も問いません。

100%望が悪いの。

望は謝る時は、必ず土下座。

奈々ちゃんの足元で土下座して、許してもらえらるまで謝り続けなさい。

奈々ちゃんが許すまで、望は土下座をやめてはいけません』

丸出しのままのお尻に、モモの手の形状に腫れを感じる望は、小さな声で「分かりました」
とだけ答えた。

パンッ!

「ふぁぎッ!

ママ、ごめんなさい」

「それともこうする？」

奈々ちゃんにお仕置きしてもらおう？

私はそれでも良いわよ。

奈々ちゃんと望の差はそのくらい離れていると思うから」

「えく、やだく♥」と奈々の声が響く中、望は自分の眉間に力が入っていくのが分かった。もはや自分の力では解くことができないくらい強く…、深く…。

パンツ！

「…ぐツ！」

ママ、ごめんなさい」

「じゃあ、奈々ちゃんもやってみなさい。

ほらツ！ 望ツ！

貴方も自分からお願いしなさい。

『お仕置きお願いします』よっ！

ママは洗い物しないといけないし。

奈々ちゃんなら安心して任せられるわ。

じゃあ、よろしくね」

「はあ〜い、モモ」

もはや嫌も応もなく、望は言われたまま従うしか無かった。

背後からクスクスと漏れ笑いがする。

モモの足音が遠ざかり、望は便器に手をついたままお尻を突き出し、妹にお尻叩きをされる屈辱を待つ。

意外にも奈々は、すぐには望の尻を叩かなかった。

たつぷり焦らされている。

望にとつてはその時間は、5分位に感じた。

いや、実際のところ1分くらいだったかもしれない。

そして望が我慢できずに声をあげようとした瞬間、奈々のいる後方で何かが光った気がした。

「はくん、こういうこと…。
でもコレって結構便利なんじゃない？」

奈々が1人納得した声がした後、望は何が起こっているのか確認しようとして後ろを向こうとする。

しかしそれは叶うことはなかった。

パアアアンツ！

「ひぐううううツ！！！！」

今までにない圧倒的な力で叩かれた痛み。

何かとてつもなく…、大きくしなる道具でお尻を叩かれたと確信できる感覚に襲われる。

「あれ？

『奈々さん、ごめんなさい』は？

モモにはしてたよね？」

「あぐううううう！

ぐううううううう！」

望にとつて、母は冷たい君臨者だったが、望のお仕置きに道具を利用することは一度として無かった。

だが今の一撃は明らかに道具を使っているとしか思えない。

今度こそ後ろを振り返ろうとした瞬間。

パアアアンツ！

「ふあぐううううう！！！

あぎおおおお！

ぐうううううう！！！！！！！」

崩れ落ちるように膝を曲げ、さきほど綺麗に掃除した床に腰を付ける望。

もはや振り返るところではない。
痛みで脂汗が止まらない。

「すっく〜い！」

く〜？

なるほどねえ。

あ〜、こういうことか。

あ、ほらお兄ちゃん。言っでご覧？

『奈々さん、ごめんなさい』って。

言えたら終わりにしてあげる(笑)「

「…ぐう…っ！」

ぐっー！」

「……………早くしろよ。《強制》」

その瞬間、なぜか身体が跳ね上がった。

そして身体が勝手に、お尻叩きを待つポーズを取ってしまった。

痛みが強すぎて、きちんとポーズを取れているか自分では分からない。

しかし「おお！ こっちも完璧じゃん！」と感嘆する奈々の声が聞こえた。

もはや何が何だか分からない。

パアアアッ！

「はぎいいいいいい！！！」

もう許してえええ！

ごめんなさいッ！

ごめんなさい！ 奈々さんんんッ！！！！

ごめんなさいッ！ ごめんなさいッ！ ごめんなさいッ！！！！！！

「プーっ！

もう？ マジ？」

嘲笑の混じった奈々の息を吐く音が聞こえ、望は終わったのだとホッとしたり。しかし、身体から力が抜けない。

お尻叩きを待つポーズのまま、ピクリとも動けない。

「あ、そっか。《解除》」

「ほふっ…」

望はようやく身体力が抜け、そのまま便器を抱くようにうずくまった。

「お兄いっくちゃんっ！

反省できた？」

望は息も絶え絶えに、「はひ」とだけ答えるのが精一杯だった。

そして便器におでこをつけたまま、痛みに耐えている望の後ろで再び光。

痛みが強すぎて、もはや何が起きているか確認しようとも思えない。

「ぜえ、ぜえ」と望の呼吸音が漏れる中、モモがリビングから兄妹に声をかけた。

「奈々ちゃん、ありがとね。

望、きちんと反省できた？」

「じゃあ、二人ともテスト帰ってきたでしょ？」

「持ってきたさい」

《体験版はここまでです。

ただ、挿絵シーンが体験版に入り切りませんでしたので、別シーンですが挿絵を挿れさせて頂きます。》

